１９人の存在

西宮市社会福祉協議会　清水明彦

兵庫県西宮市では、日常生活のほとんどに介護を必要とし意思の表明がたいへん難しい障害の重い人たちの、市内での地域自立生活展開が進められてきました。１９８１年に西宮市独自の重症心身障害の市民のための通所の地域活動拠点「青葉園」が成立し、設立当初より「自己を十分に実現できる場をもちいきいきと暮らしていくこと、またそれをめざし続けることは、人間として当然の姿で願いである。それはどんなに障害が重くとも追求され続けられるべきであり、基本的人権のひとつである。」とその基本理念の明記の元、青葉園を中心に地域での暮らしづくりがすすめられ、３７年の経過の中で様々な地域の中での暮らしが次々と開発されてきたのです。

今では、青葉園の多くの方々が、親元を離れ地域自立生活（２４時間の支援の輪のもとでの一人暮らしや2～３人での共同生活）をされています。50歳代、60歳代となられた実家を出て暮らす青葉園の方たちの心配事は、実家の親御さんのことです。親御さんが次々と介護を必要とされるようになってきました。ご両親が２人とも80歳を超え認知症の傾向が出てきている方もおられます。親御さんのことが心配で親元に帰ることも選択肢としてみんなで論議しています。週末は親御さんを元気づけるために実家へ帰るという願いを実現することが園職員の大切な役割となっています。親御さんの最期を病院まで看取りに行かれた方もおられます。本当に障害の重い方ですので病院側が困惑する場面もありましたが、お母様は娘さんのお顔をさすりながら本当に達成感に満ちた表情でお亡くなりになりました。そして園職員や後見人の寄り添う中、ご本人が喪主となって葬式を執り行い、今は仏壇を守ってその家で２４時間の支援の輪の元でお住まいです。よく考えてみればこの様なことは当たり前のことでこれからも次々起こってくると考えています。また、高齢の両親の暮らす実家のすぐ近くの借家で地域自立生活を続ける方や、親御さんを亡くし妹夫婦の暮らす同じマンションの別階で部屋を確保しての暮らしを選んだ方もおられます。

青葉園では例えば「親亡き後の（施設、グループホーム)」というようなフレーズはピンときません。一人ひとりそれぞれ自宅やルームシェアで暮していこうとされています。そしてそのことはもはや当たり前のこととなっているのです。親を看取って、そして一人ひとりが住民として最期まで地域でどんなふうに豊かに老い、暮らしていくのか、これからどんな暮らしぶりが生み出されてくるのか、そのことはある意味、未知でありとてもワクワクします。

新しい生活文化が、年を経て地域で暮らしていく青葉園の人たちにより産み出されてこようとしています。「親亡き後の…。」という閉塞文化を越えて、新たな地域共生文化へ。

そんなワクワクする気持ちで今、一人ひとりの暮らしぶりを思いながら、親元を離れ地

域自立生活をしている青葉園の人たちを指折り数えてみると…１９人。

そして、相模原で殺されたのも…１９人。なんだかどうしょうもない気持ちに陥ってしまいます。あれは新たな地域共生文化圏への愚劣なテロだ。１９人はその犠牲者だ。そんな風にうけとめてしまうしかないのでしょうか…。

それでもなお、怖じることなく楽観的に前に進みます。青葉園の基本理念にあるように当たり前の人権として、それは認知症高齢者にも発達障害の方、精神障害の方にも、だれもが当たり前に自分らしく暮していく権利があり、そのことこそが共生社会の実現にほかなりません。すべての市民の不安を相互エンパワーメントにより、生産的希望へと転じていく事こそが今求められています。目指すのは「親亡き後の…」ではなく「子も親も地域住民と共に、みんなが相互にその生きる力を機能させ合いながら、いきいき暮らしていく共生のまちの実現」だと思われるのです。１人ひとりの存在が尊重され、誰もがその人らしく生きる持続可能な共生社会の実現に向けての新たな地域共生文化運動こそ、今必要とされているのはないでしょうか。そしてそのことはこの国の未来への希望をつくることになるのだと思うのです。